

■ 書 評



誤診のおこるとき—精神科診断の宿命と使命—

著 山下 格
みすず書房
2009年11月
200頁, 定価 3,360円

本書は1980年に出版され1996年の改訂後も数回にわたり増刷され、多くの読者をひきつけた「誤診のおこるとき—早まった了解を中心として—」の大幅加筆改訂版である。

タイトルの「誤診」という言葉には「どぎつい響き」がある。ことに昨今の医療訴訟の状況を鑑みるとなおさらである。しかし、診断が未知の状態から試行錯誤をしてたどりつき、それでもすべてをわかりつくすことができないことを伝えたいために、「誤診」という言葉があえて使われている。第1部の「精神科診断における誤診と了解」によれば、「診断とは、疾患について、疾患をもつ個体について、さらに個体をつむ環境について、必要なあらゆることを知り尽くそうとする、終わりのない努力を意味する」のである。精神科疾患では診断や予後の指標となる物理化学的所見がないことが多いうえに、患者自身が自己の状態や経過について診察をうけることで初めて気づくこともしばしばであるから、診察者の「了解の能力」によって情報の質と量が左右され精神科特有の「誤診」がおきるといえるであろう。これらのことは精神科医であれば日頃から感じていることであるが、改めて整理しとらえ直すことができる。

第2部では精神医学的判断、了解の困難性と過程

が症例を通じて提示され、心得ておくべきことが明確にされる。判断の過程が臨場感をもって展開されるので、自分がその場にいたらどのようにするかとしばし立ち止って考えることの連続である。各章立てには大まかな疾患名があがっているので、いわば「真犯人」はわかっているが、引き込まれて読むのは「刑事コロンボ」のごとく深く了解する過程が描かれているからである。

具体的な症例の検討は、第2部「第1章 身体疾患の症状と了解」「第2章 気分障害と了解」「第3章 うつ病の労務災害と職場復帰」「第4章 統合失調症と了解」「第5章 パニック障害と了解」「第6章 精神安定剤・睡眠薬の副作用」「第7章 発達障害と了解」となっている。今回改訂で追加された3, 5, 6, 7章を含めいずれも重要かつ現代的課題であり、50年以上の臨床経験に基づいて把握され語られているので重みと深さがある。各章には2~3の症例が取り上げられており、いずれも思いあたるところがある内容で奇をてらった症例は1例もないがゆえにいつそ我がこととして感じられる。本書の醍醐味は症例をじっくり読み推論熟考するところなのでその内容を書評で書くことができないのが残念であるが、その中で一貫しているのは「誤診」が絶えずおき、絶えず修正されながら進む精神科診断・治療の困難性と面白味である。

本書で加筆され副題となっている「付章 精神科診断の宿命と使命」では、「精神科医が内蔵すべき精妙な計器としての了解の能力」を習得する方法が説かれている。症例の愁訴・症状を具体的に聞き取るという基本にもとづいて操作的診断が活用されるべきことが指摘される。そして、本書を読み終えた読者は、他者の心的なものに向き合う精神科診断の宿命性と「了解の能力」を高めることが精神科医の使命であるという著者の強い思いに感銘をうけるであろう。(細田眞司)